

平成 27 年度第 2 回 京都市市民参加推進フォーラム
議事要旨

- 開催日時：平成 27 年 7 月 30 日（木） 午後 6 時 00 分～午後 8 時 30 分
- 開催場所：中京区役所 第 1, 2 会議室
- 出席者
 - （１）市民参加推進フォーラム委員（13 名）
永橋座長，竹内副座長，石井委員，兼松委員，川島委員，芝原委員，杉山委員，
高田委員，野池委員，西村委員，初田委員，壬生委員，樋口委員
（欠席委員：高垣委員，林委員）
 - （２）事務局
総合企画局市民協働政策推進室
淀野担当局長，小田市民協働推進室長，北川市民協働担当課長，松村地域づくり
推進課長，山下市民協働担当係長、松岡
株式会社地域計画建築研究所
嶋崎，戸田，大河内
- 傍聴者 2 人

■ 議題（１）第 2 期京都市市民参加推進計画の改訂について

＜委員意見＞

- ・ 「市民参加・推進体制検討部会」「市民活動支援検討部会」のメンバー構成を各自確認していただき、承諾していただければと思う。
- ・ 両部会長には就任を快諾いただいたので、選任をご承諾いただきたい。（異議なし）
- ・ 進め方は、10 月中旬までに提言の最終案を出さなければならないので、タイトなスケジュールとなっているが、相談しながら進めていきたい。（異議なし）

＜決定事項＞

- ・ 部会メンバーと部会長について出席委員の了解を得た。
- ・ 進め方について承認を得た。

■ 第 2 期京都市市民参加推進計画改訂にむけた提言項目について
～基本方針 1 についての議論

資料3「計画改訂に向けた提言項目」基本方針1について

＜委員意見＞

- ・ フォーラムの役割は提言の作成だが、全体会では基本方針1を議論し、基本方針2と3については、各部会で細かく意見を出していただく。

○ 基本方針1「事務局からの意見」について

＜委員意見＞

- ・ 基本方針1「市民との課題・未来像の共有」における「事務局からの意見」は、事務局からの提起と受け止めて議論させていただく。
- ・ 「これまでのフォーラム委員会からの意見」は1年間議論してきたものを凝縮したものと理解している。
- ・ 「市民は把握しているが、行政は把握できていない情報」とはどのようなものか。その投げ掛けにはどのようなバックグラウンドがあるのか。

＜事務局＞

- ・ 行政が把握できていない情報があるので、どのようなものを想定して考えれば良いのかという点を意見として出していただきたい。

＜委員意見＞

- ・ 行政として把握できていない情報をきちんと把握して、具体的な施策や事業に反映させたいという思いが根底にあって、そのような情報をいかに把握できるかという問い掛けとして受け止めたい。
- ・ 市民が持つ課題意識・未来像・情報をきちんと取り上げて整理し、共有したいという思いから、そのための方法やプロセスについて意見を出し合いたいという趣旨だと思う。
- ・ 100人委員会等いろいろな取組が行われてきたが、さらに充実させるということか。
- ・ 「事務局からの意見」の背景には、事務局の経験の中に思い当たる「ハッとした」瞬間があったのではないかと。それがどういう時だったのかを伺いたい。

○ 尼崎の課題発見・問題分析コンペについて

＜委員意見＞

- ・ 「事例調査：市民公募型調査事業への補助(尼崎の課題発見・問題分析コンペ)」は、尼崎で行われた事例か。

<事務局>

- ・ 全国の事例を調べる中の一例で、このようなことも調べたいという決意表明である。

<委員意見>

- ・ 尼崎の例は面白い。アイデアコンペを行うのは最終段階で、その前に課題を共有しようということである。いきなりアイデアを求めても課題が明確になっていないとつまらない案が出てくることが多く、その前に「問う」という段階が必要である。「何とかしたい」という段階から「こうするために、どうすれば良いか」と問いの解像度を高めていくと、より効果的なアイデアが生まれる。greenz でもアイデアを作るワークショップを行う場合、課題・問い・アイデアという形で必ず問いを作るセッションを行う。
- ・ 問題分析がきちんとなされているかどうか重要であり、問題分析の場として市民や市民団体に開かれた場を行政がプロデュースする。安易な解決策は危険なので、問いをしっかり吟味して、何が必要かを共有することが適切な取組である。

○ 未来像の共有について

<委員意見>

- ・ 資料を読んでも未来像が見えない。提言は 2011 年だが、2013 年に日本が大きく変化している中で、どの未来像を共有していくのか、明確にしなければならない。
- ・ 冒頭で「京都市はこのような形で取り組んでいる」と市民に知らせることも必要。
- ・ エネルギー問題をどう考えるかということが 1 つのテーマであり、原発の問題や安保法案等も含めて、京都市の考えが不明確なままでは課題を共通認識として深められない。
- ・ 問題を理解することが重要である。今ある問題をここで繰り返し議論する中で、「将来こういうことをしたい」という内容を具体的に議論できると良い。
- ・ 一人ひとりのレベルから 150 万の政令都市としての 10 年後の姿という未来像を作るために、市民参加あるいは協働が必要だということだと思う。京都市の 10 年後の姿は基本計画の改訂で作るが、我々も市民としてきちんと議論する必要がある。未来像の共有は、共有の仕方を提言するもので、未来像の内容を提言するものではないと理解する。
- ・ 市民参加推進計画を進めていくと豊かで活力のある地域社会が実現するというのは、目的が抽象的である。具体的なイメージをいろいろなステークホルダーが参加や協働の中で作っていく必要がある。それが「自分ごと」になるかどうか大事なキーになる。

<事務局>

- ・ 現計画の未来像は市民参加推進計画を進める上での未来像であり、様々な行政分野で施

策を進める時の手法として、できるだけ市民参加を取り入れていこうというものである。それぞれの行政分野で行政計画、基本計画があり、それぞれに未来像がある。特に、地方創生の関係で、「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略もあり、今年くらいにオープンになって、今日的な課題についての京都市の考え方が新しく出てくる。

- ・京都市が進めている施策を、各行政分野や基本計画等、全体で進めていく時に、市民と行政が共有できるような仕組みを市民参加の観点から推進するにはどうすれば良いかということ、「未来像の共有」という趣旨で考えているので、幅広い目で見えていただきたい。
- ・市民の「京都市をこうしたい」という思いとすり合わせながら「本当に目指すべき未来像とは何か」を展開することが必要。未来像を共有するためのプロセスを、市民参加推進計画の中で重要なポイントとして挙げなければならないという問題意識から提案した。

＜委員意見＞

- ・未来像を作るためのプロセス、手法、場、ステップ等をきちんと事前に用意して、問題分析もして、一緒に市の将来像に関わる仕組みが必要という趣旨だと理解する。

○ 基本方針 1 の位置づけについて

＜委員意見＞

- ・基本方針 2 と 3 について各部会で議論し、その中の新規の話や強調したい話を基本方針 1 に挙げるのか。

＜事務局＞

- ・全体会や部会でこれに関連して議論した内容も含めて、基本方針 1 をどのように書いていくかということを固めていければと思っている。
- ・市民が未来像を作ることに関わる手法を、新しく取り組めるなら施策として挙げたい。

＜委員意見＞

- ・基本方針 1 を実現するために基本方針 2、3 をしっかり書くという円環関係がある。

○ 課題の共有について

＜委員意見＞

- ・「市民との課題・未来像の共有」とあるが、課題は共有が難しい。市が考える課題は全市民に共通する大きな課題だが、市民が参加しようとする時の動機となる課題は「自分ごと」であり、課題の大きさが違う。そのような中で、市は市民の「自分ごと」レベル

に近い多様な課題をしっかりと受け止める覚悟があるのか、明確にしなければならない。

- ・「自分ごと」の課題も大きな課題になる可能性があるので、市の施策やパブリックなものとして、小さなつぶやきにも耳を傾けることを市として打ち出さない限り、いくら市民に「自分ごと」として考えてほしいと言っても市民は納得できない。
- ・「自分ごと」の個人レベルの課題を集約して、「私たちの問題」にスケールアップするような仕組みが必要である。

<事務局>

- ・受け止める＝行政が宿題として受けて実現するという解だけではない。「私ごと」が社会的にどのような意味があるかを行政も考えながら、「私ごと」が「私たちごと」になるような受け止め方が必要である。
- ・逆に、行政の課題は切り口が大きくて、市民一人ひとりに「自分ごと」として捉えていただけないという悩みがある。したがって、市民のそれぞれの生活にどのように関わるかということも含めて話をしながら、双方から近づいていくことが必要だと思う。

<委員意見>

- ・P3に「市民が持つ多様な課題意識・未来像・情報を、どのように取り上げ、整理し、共有するのか」という事務局からの投げ掛けがあるが、つぶやきが「自分ごと」→「社会ごと」→「大ごと」になっていくことを、提言の中で示せるように表現していく。

<事務局>

- ・「私ごと」の課題は苦情レベルが多く、それが「私たちごと」から「社会的な課題」になれば、施策に反映させた課題解決の動きにつながらない。そういう意味で、『自分ごと』として受け止められるための工夫が必要」という部分は無責任には書けない。

<委員意見>

- ・1対1で対応したら150万通りの課題に応えなければならないので、1人が課題を示した時に同じ課題を持った人が出てきたら、それに対して一緒にできることや助けてくれる仕組みを考え、行政が制度等を示して「社会ごと」にしていく仕掛けが重要という認識は事務局も持っている。それはフォーラム委員も共有していると思う。
- ・「事務局からの意見」で「情報を共有するだけでなく、課題の背景について理解を深め」とあるが、実際に市が取り組む中で足りないもの、もっと深めたいところを知りたい。
- ・「望まれる」「必要である」という表現では、行政がどこまで本気なのかと懸念される。

協働型社会や市民と行政の共有する機会として、施策を作る時に原則協働型で行うと決まった上で、できないところを挙げるのか、できるところから行うのか、ゴールがどこにあるのか、その点を確認したい。

○ 情報の共有について

<委員意見>

- ・ 「提言項目 3」について、市の情報の大きさに対して、市民側からの発信の機会も一層求められる。まち・ひと・しごと創生の提案が個人のレベルで出てきた時に、それに対してどのようなアクションをされるのかを期待している。
- ・ 情報はどうなると共有したことになるのか。市民が情報を出しても、それが広く理解されているのかどうか分からないので、フォーラムやこの場で整理が必要である。

○ なぜ協働型社会が必要なのか

<委員意見>

- ・ 「提言項目 1」について、そもそもなぜ協働型社会が必要なのかと考えた場合、未来像や未来の問題を共有していくと協働型社会にした方が合理的という結論に行きつくと思う。市民参加を進めて問題解決する中では協働型が皆の納得できる方法になると思うので、協働ありきで話すのは違うと思う。
- ・ 仙台市が 4 月に協働のまちづくり条例を作ったが、市長自ら協働を 30 年間進めており、行政単独で施策を行うよりも、はじめから協働した方が良い事業ができると明言されて、実績を積んでいる。行政にとってもその方が限られた資源を有効に使えるし、その結果、市民に良いものを還元できるという確信を持って進められている。

○ 基本方針 1 の議論のまとめ

<委員意見>

- ・ 市民の課題をどのように共有できたのかという点では、「私ごと」を「社会ごと」として行政も受け止めなければならないし、市民も「これで進める」という形にしなければならない。一人ひとりのつぶやきを「社会ごと」にするサポートが行政として不十分だった点や、ここまでどのような形で施策につながったか等の経験を伺いたい。
- ・ 「原則協働にすべき」という意見が出たが、原則としてできないとしたら、できない理由の説明が必要である。事務局はどこまで行いたいと考えているのか。行政計画は担当課だけの計画になりがちなので、それを避けたいという思いはあると思う。

<事務局>

- ・ できるところから取り組むのではなく、「これを全庁的に進めよう」という考え方でこれまで市民参加に取り組んできた。今回の市民参加の推進は基本的にそのようなスタンスで考えており、フォーラム委員の皆様から「ここまで行くべき」という意見があれば、実情を踏まえたやり取りをしながら、どこまでできるかというところをまとめたい。
- ・ 経験談だが、ある典型的なスプロール地域では人口の急増からハード面の整備の要望が強かった。ところが、地域の方とやり取りをしている中で、新しくできた建売住宅の人たちが町内会に入らないという悩みが分かり、「このままでは自分たちの地域が崩壊する」という危機意識を行政への要望に転嫁していたことがわかった。根本的な問題を把握し、そこから地域ビジョンを作って一緒に取り組む活動がスタートした。
- ・ そのように、現場レベルでは地域の方々と対話する中で職員が本当の問題に気づく場面が多々あるので、そういうものをいかに施策に活かしていくか、地域の取組をどのように活性化していくかということを考えることが重要である。要望の背景に何があるかということを考える機会をどう作るかということがこれから必要ではないかと考えている。

<委員意見>

- ・ 職員自身が市民から上がってきた苦情、要望の背景を理解することが重要であり、そのためのトレーニングや対話をする時間の確保が必要である。その中で市民も自分が本当は何を望んでいたかということに気づく。そういうやり取りができることが大事である。
- ・ これまで京都市が行ってきた各区役所のカフェやまちづくり広場、100 人委員会等の状況については、フォーラム委員が成果や不満などを把握されていると思うので、部会の方で忌憚なく出し合い、学びの場にしていきたい。
- ・ 未来像については、事務局や市長にも問い掛けつつ、我々の方でも協働を進めながら、我々の中の将来像、未来像を部会や全体会の中で出していきたい。

○ 部会の議論について

<委員意見>

- ・ これまでの議論を踏まえて、それが分かるような表現にするよう、各部会では書き振りに関する意見も出していきたい。

■ 市政参加・推進体制検討部会

【基本方針 2 「市民の市政への参加の推進」】

【計画を着実に進めるための推進体制】

【委 員】

野池部会長、永橋座長、兼松委員、芝原委員、高田委員、壬生委員、樋口委員

【事務局】

京都市：淀野担当局長、山下担当係長、松岡

アルパック：嶋崎、大河内

資料 3 「計画改訂に向けた提言項目」基本方針 2、推進体制について

○ 市政参加の定義について

<委員意見>

- ・ 市政参加とは、市民が政策形成に参加することか。

<事務局>

- ・ 政策形成の過程に参加いただくことも市政参加であり、ボランティアのような形で実際に市政に参加していただく形もある。市が行う事業に協力いただく形も市政参加になる。

<委員意見>

- ・ 本編 P59～60 に「市政の領域」を「行政の責任と主体性によって独自に行う領域」と設定しているが、その前提として「市民」には 3 つの役割がある。1 つは京都市政のオーナーで、市民が信託して職員を雇い、議員を代表として選び、その人たちが市政運営を行う。ボランティアや審議会の公募委員等で直接的に関わるパターンもある。一方で「市民活動の領域」は市民が自ら活動する領域であり、ここでの市民はアクターである。市民がプレイヤーとして振る舞うところに行政がどう関わるかということになる。また、市民はユーザーとしての立場もある。一般的に窓口業務と言われるところでユーザーとして関わる。これらを言葉だけで理解するのは大変なので、我々が市民としてどう動くのか、行政としてどう動いてほしいのか等、振る舞いとして考えることが大事だと思う。

○ 市政参加の適切なタイミングについて

<委員意見>

- ・ 提言項目 2 の「適切なタイミング」については、細かく検討しておく必要があると思う。

＜事務局＞

- ・ 政策形成に関与するタイミングについて、行政はある意味でストーリーができた状態で意見を聴くことがあるが、本来はもっと早い段階で意見を聞いて、取り入れられるものはできる限り取り入れるというスタンスで取り組むべきだということである。

＜委員意見＞

- ・ 今まで意思形成過程では直接の関わりを除外していたが、この段階で市民に出したら反対意見が出て困るということも含めて早めに出すことを「適切なタイミング」としており、そこまでラディカルでアグレッシブな意味があると共通して理解できる。
- ・ 提言項目をブレイクダウンさせた○印の文章は「適切」を使うよりも、可能な範囲で、今言われた言葉に置き換えた方が受け取る方は受け取りやすいと思う。
- ・ 提言項目の提言はフォーラムが出すので、フォーラムの言葉として出した方が良い。

○ 情報公開と市政参加、推進体制の一体化について

＜委員意見＞

- ・ 元々基本方針は、現行計画では情報公開と市政参加を分けて書いていたが、1 つにした方が良いと意見して 1 つになった経緯がある。「公開」するから「参加」できるわけであり、これは表裏一体なので「公開」という言葉は必要だと思う。
- ・ 推進体制も 1 つにした方が良いと述べたが、分けた方が良いという判断なのか。例えば、推進項目（3）の提言項目 4 の「市政への参加をすすめるための人材育成」と、推進体制の提言項目 3 の「市民参加を推進するための人材育成」は何が違うのか。
- ・ 情報の公開と参加と推進体制が 1 つの基盤で、その上にまちづくりが花咲くというイメージなので、1 つにした方が分かりやすいと思う。

＜事務局＞

- ・ 推進体制は横串で、基盤的なものと考えている。それぞれの施策や各項目を実際に動かしていくという意味で、全体に関わるテーマとして分けるべきではないかと考えている。

＜委員意見＞

- ・ 前段の議論に準じて 1 つにすると「市政参加の基本となる情報の収集と公開の徹底と市民の市政への参加の推進」という表現になるか。これを短くまとめてほしい。
- ・ 市民が主語なのは当たり前なので「市民の」という文言は不要。シンプルに「市政の公開と参加の推進」で良いのではないか。

- ・ なかなか「自分ごと」になっていないので、市民にオーナーやアクター、プレイヤーとして市政に関わってほしいということである。
- ・ 市民だけではなく、ここで働いている人もいる。
- ・ 「市民」の定義は広く取ることが前提としてあるので、どこかでフォーラムとしての「市民」の定義を示すことが必要である。働きに来ている人や学生等も入ると思う。
- ・ 京都市にとって観光政策は非常に重要だが、来街者や観光客は入らないのか。

＜事務局＞

- ・ 働いている人も含めた広義の「市民」と事務局は捉えているが、今の計画では観光客までは含めていないと思う。

○ 評価のためのチェックリストについて

＜委員意見＞

- ・ チェックリストをこの基本方針にどのように反映するのか。
- ・ P16の「評価システムのあり方」に「仕組・組織の運営方法」として「施策のPDCAサイクル」とある。今までの計画も45の施策に対して、年度末に事務局がそれぞれの進捗をチェックしていたが、施策1～45は一連のステップなので、各部局の一つひとつの事業が全庁的に原則として協働を行うのであれば、市民参加がどこまでできたのかということについて施策1～45のすべてをチェックして判断した方が良いのではないか。
- ・ 細切れで提言する前段として1～45につながりがあることを最初に言うべきではないか。
- ・ PDCAで言えば、事業を行ってからチェックしても遅い。各部局が各施策項目をプランニングする時にどこまで行うかをチェックしてから進めようという提言だと思う。
- ・ もう1つの書き方として、施策の一つひとつ出して、別にチェックリストを作る方法もある。それで「できているか、否か」をまとめていくと具体化できるのではないか。
- ・ そのためには、P15の提言項目1の「市民参加推進体制の強化」が必要である。職員がある事業を立ち上げた場合、市民参加推進計画の具体的な施策項目を踏まえて計画を策定し、進捗管理を行い、完了後に「できなかったこと」も含めて共有するために担当者とそういう場を設けることがP15の提言項目1または2という理解で良いか。

＜事務局＞

- ・ そのような理解で良い。今までは一つひとつの事業をどこまで達成したかという形式的な評価だったが、今年度から事業ごとの結果ではなく、施策ごとの評価に変えている。

○ 「人材育成」の意味と表現について

<事務局>

- ・ P8 の提言項目 4 の人材育成は、庁内の人材育成ではなく、市政参加と一緒に進めていただけの市民の人材育成である。分かりにくいので、文言を考えたい。

<委員意見>

- ・ 提言項目 4 は、市政を積極的に「自分ごと」「社会ごと」として行う人材を増やすのか。

<事務局>

- ・ 他の人に伝えていただける人も増やしていく。

○ 「必要がある」「努める」「求められる」の書き分けについて

<委員意見>

- ・ 「～する必要がある」「～に努めるべき」「～が求められている」という文言の違いは前のめり度の違いか。「～必要である」は強い印象があり、それ以外は弱気に感じる。
- ・ もっと強気に「～不可欠である」「やらなければならない」という表現もある。
- ・ フォーラムの委員で議論された言葉でまとめたら良いのではないか。
- ・ 提言を受けて京都市の方で計画を策定し、それを基本方針として各部局で事業ごとに市民参加を行うとして、この段階で強く言うことが可能なら強い表現にしたい。

<事務局>

- ・ それを受け止めて京都市がどうするかという問題になる。強く言われたことはしっかりと考えなければならないし、「～べきである」という提言は踏まえなければならない。
- ・ その中でどれが大事なのか、強弱があった方が行政側も受け止めた後で考えやすい。

<委員意見>

- ・ 「必要である」「求められる」という表現の違いは、強弱を考えているのか。

<事務局>

- ・ 強弱はついていますが、そこまで厳密に文言を精査できていないわけではない。
- ・ 例えば P4 の「努めるべき」は努めるのでそこまで強くない。一番強いのは「必要である」だと思う。提言項目 4 の「充実が求められている」という表現が一番弱い。

<委員意見>

- ・ 大事なものは、フォーラムの提言では「必要である」と言っても良いのではないか。
- ・ 提言項目の部分だけではなく、下に続く文章も出すなら、それを提言した理由として、「こういうことで必要だ」と行政に説得力を持って書くべきである。

○ 「困難な政策課題」の意味について

<委員意見>

- ・ P5 の提言項目 2 の「困難な政策課題」とはどういう意味で困難なのか。

<事務局>

- ・ 実現が困難な課題の場合と、行政としてできない、やりたくないという意味の困難と両方の意味がある。

<委員意見>

- ・ 「市民からの強い反発が予想されるような課題であっても」という意味に受け止めた。
基本方針 1 の「マイナス・ネガティブに捉えられる情報や、これまで市が出す必要がないと判断してきた情報も積極的に共有していく」というところにつながるのではないか。

○ 「フィードバック」という表現について

<委員意見>

- ・ P6 の「市民にわかりやすくフィードバックし、市政参加への意欲向上を図る」というのは、市民にモチベーションアップさせるためにフィードバックするという意味なのか。
表現に「やらせている感」があり、上から目線を感じる。

<事務局>

- ・ 「関心を高める」という表現の方が良いかもしれない。

<委員意見>

- ・ フォーラムからの提言なので「きちんとフィードバックしてほしい」と求めている。きちんとしたフィードバックがあった方が、市民にとっても自分の労力が形になったことを示されて納得できるので、京都市はきちんとフィードバックしてほしいという書き振りになると思う。

○ 3つの推進項目の位置づけについて

<委員意見>

- ・ 推進項目が3つに分かれているが、連続した話なので、提言を分ける意味があるのか。
- ・ ステップ1、ステップ2、ステップ3というイメージか。自分に関係があると思って触れてもらうのがステップ1。「次の機会も参加しよう」というのがステップ2。「もっと積極的にプレイヤーとして関わろう」というのがステップ3である。
- ・ 実績があって関係性がある人ならステップ3からできるので、3つのフェーズが重要だが、1、2、3という進歩史観のようなものではなく、どこから入っても良いということをフォーラムの提言として書いておく必要がある。

<事務局>

- ・ これは行政側が計画として行う中でのステップである。

<委員意見>

- ・ 市民が成長していく姿であり、無関心な人は関心を持って、関心のある人はよりアクティブなプレイヤーになっていただくという進歩史観である。

○ フォーラムとしての編集の必要性について

<委員意見>

- ・ 「市民がまだあまり積極的でない場合」「少しずつ盛り上がってきた場合」「非常に盛り上がった場合」というような表現にしてはどうか。主語はフォーラムなので、これは我々が作ったことになる。したがって、我々の言葉で表現して良いのではないか。
- ・ ここに至るまでに編集に関して強く言及する人がいないようだが、このような場に必ず編集者が1人いなければならないということになる可能性もある。一度編集したい。
- ・ それでは、座長、副座長、部会長に加えて編集長を設けたい。
- ・ 編集長は自分なりの言葉遣いを考えるので、内容に関しては皆で議論していただきたい。
- ・ 一旦編集長に考えていただいて、それを見て理解を重ね合わせて協働するという作業が可能だと思う。

■市民活動支援検討部会

【基本方針3「市民のまちづくり活動の活性化」

推進項目（1）市民の関心をまちづくりへの参加につなぐ機会の充実】

【委員】

川島部会長、竹内副座長、石井委員、杉山委員、西村委員、初田委員

【事務局】

京都市：小田室長 北川担当課長 松村課長

アルパック：戸田

○ 既存事業の検証の必要性について

＜委員意見＞

- ・ 「一層の工夫」とあり、ゼロから作るわけではないので、振り返って見ると何が足りなくて、これから何をしなければならないのかというところを具体的に詰めたい。

＜事務局＞

- ・ 区役所などを窓口として仲介するところもあり、我々も日常的な仕事の中で頑張っているが、「きっかけがない」と言われることが多い。そういう意味では、今の我々に何が足りないのかを考えていかなければならない。

○ 関心から参加への結び付けについて

＜委員意見＞

- ・ 一口にコーディネートと言っても、参加をする層もいろいろなので、全部適応できるコーディネートを示すことは難しい。より具体的に示さなければならない。
- ・ 現場の活動と言葉が結びつかない。地域の方やまちづくり活動をしている方の多くは今も要望型なので、そのあり方を変えていくことが必要。行政にしかできないことと地域でできることを分担して、地域の方々に納得してもらいながら進めていくことがこれからのまちづくりであり、参加ではないか。要望だけして実際に動くことに対して腰の重い人たちのいかに巻き込んで一緒に活動することにつなげられるかということである。
- ・ あるいは、若い人で、個人的なビジョンや思いで活動したいと思っている人を巻き込むことが別の次元でできないか。
- ・ 動機のないところに参加はないので、その動機がどこにあるかを考えなければならない。一般の人は課題が明確にならないと動こうとしないが、課題が発覚した時に「早く解決してほしい」と思うのが人情なので、その思いがどのように施策と結びつくか、意見の

コンセンサスにつながっていくか、どうしたら納得できるかということが大事である。

- ・ P9を見ると、市民の関心をまちづくりへの参加につなぐ機会を充実するために、施策番号 24、25、26 を行っているが、ここではさらに市民の参加につなげるための工夫をする
と提言している。こういうことが揃っていても一人ひとりの気持ちとつながらなければ
ならないことをもう少し盛り込まなければならないと思う。
- ・ 活動場所も資機材も提供しているのに、なぜ人の心に届かないのか。なぜ活動に参加し
ている実数が増えないのか、活動自体が他の市民に知られていないのかという状況が、
提言が出てきた裏側にあると思う。

<事務局>

- ・ 施策番号 24、25、26 は、活動意欲のある人をどうサポートするかという施策なので、意
欲のない人たちの掘り起しには効果を発揮し得ない。例えば、空き家問題は、直ちにそ
の地域の人たちの生活に支障が出るような状況にはならなくても、このまま進むとどう
なるかということを説明されると問題への気づきが生じ、そこから地域で何とかしなく
てはならないという話につながることもある。個々の問題がそういう動きへつながる瞬
間をどう作り出していくかということが重要である。

○ 現状分析の必要性について

<委員意見>

- ・ 活動場所をどういう人が使っているのか、知識を提供する場にどのような人が来ている
のかという分析はしているのか。

<事務局>

- ・ 数値的にしっかり掴んで階層で分析することはできていない

<委員意見>

- ・ 今の活動で足りないのであれば、どこに届いていないのか、どういう提供の仕方をして
いるのかを考えなければならない。来ていない人たちを呼び込みたいので、ターゲット
の戦略が間違っているのではないか。どのターゲットに対して集中的に呼び掛けなけれ
ばならないのか、どうすればその人たちの心に届くのかということを分析して、戦略を
打ち出さなければならない。場の提供や話し合う機会の提供だけでは心に響かないの
ではないか。

○ 活動継続のための課題について

- ・「まちづくりカフェ」が活発になって 100 人くらい来ているが、活動が続かない。同じ課題を持つ人が集まって話をし解散の繰り返しで、実際に活動している人たちの場に行って次の活動につながるところまで達しないまま終わってしまう。実際に活動している人たちがその場にいて一緒に活動を継続的に行う等、そこから先の支援がなければ次第に飽きて人が来なくなってしまう。
- ・集まった人たちをグループ化しながら活動に持っていくようなコーディネーションが必要だが、それがまだできていない。その理由は何か。
- ・活動したい人はいるが、リタイアしたサラリーマンや、主婦、若い世代の母親たち等、組織の作り方が分からない人が多い。そこに対する支援がなく、組織の作り方を知っている人に発信できていないために、主体になればスキルを発揮できる人々の参加が得られないまま、人材を活かせていない。
- ・自分がメンバーとしてどう活かせるかを持っている人でなければ続けられない。自分 1 人で活動したいと言っても、誰も来てくれなかったら終わってしまうので、100 人委員会も 1 期から 4 期まで同じようなことをしていたのであれば、同じ課題で動いていた人たちをつなぐことも必要である。しかし、今はそれをできる人がいない。例えば、そういう人が 5 期のメンバーと東山で同じようなことをしているメンバーをつないでくれれば、それだけでもメンバーは多くなり、大きなパワーを活かすことができると思う。
- ・ただ、つなぐ役が難しいので、内容を各区が共有できるようになると良いと思う。

<事務局>

- ・各区で「まちカフェ」が立ち上がっており、その中でまちづくりアドバイザーが情報発信やさまざまな役割を担っているが、まちづくりアドバイザー制度が 10 年を経過する中で、カフェ事業の今後のあり方についても考えなければならないという話が出ている。
- ・具体的な方向としては、まちづくりアドバイザーはきっかけをつくり、自然発生的にカフェ事業を起こしたい。地域の中でまちづくりアドバイザーの役割を担ってもらう「まちづくりアドバイザー 2 世」的な存在を作ろうと考えており、そういう人が生まれて 2 つ目のカフェ事業が自然発生すると、課題解決のためのグルーピングができた時にその人がキーパーソンとなって動かしていける。地域の方々にその役割を期待している。

○ 人材情報の活用について

<委員意見>

- ・100 人委員会を何度も行うほど人が集まっているということは、応募する人がそれだけ

いて、その度に自分ごとの課題を発信している。それにも関わらず、同じ回に自分と同じ課題を持った人がいないだけで活動が潰れてしまうのは勿体ないので、それを時間軸でつなげられないか。例えば、前期と今期に同じ思いを持つ人がいたら、担当が変わってもその情報を次につなげていく仕組みを庁内に作る等、来てくれた人を人材として縦につなげる工夫が必要だと思う。

<事務局>

- ・ 職員がつなぎ役を果たしてコラボレーションが実現した例はこれまでもあるが、仕組みとして確立していない。例えば、区のまちづくりカフェ事業から生まれたプロジェクトに助成金を出す形でサポートするところまではできるが、実際に形になるまで傍で支えながらつなげていくような取組は難しい。区の職員がそこまで関わるには限界がある。
- ・ その役を誰が担うのか。地域の中にそういう人たちを見出していくのも1つの方法だが、京都創生の中に「お宝バンク」という取組があり、その中の人たちをコラボさせることを職員が中心になって進めようとしている。ただ、職員だけでできるか否かは考える必要がある。システムチックに取組を支えるところまではできていないのが実情である。

<委員意見>

- ・ コーディネーションは全体をきちんと見られる人が常時いることが大事であり、同時にその機能が受け継がれていくことが大事である。そのコーディネート機能を行政の中に置くか、委託するか、システム化してデータベース化するか、工夫はいろいろあるが、いずれにしてもやる気のある人材の重なりを把握することが重要である。そのように、1つの分野だけに固執せず、いろいろなことをしようとしている貴重な人材を見つけることができているかどうかは課題である。

<事務局>

- ・ 「お宝バンク」のように、プロジェクトや企業をストックする機能と合わせて人材をストックして活用できるような機能の実現を考えており、推進計画を見直した後はそういうことに取り組みたいという思いはある。

【推進項目（3）多様な主体が連携する協働のまちづくりの推進】

<委員意見>

- ・ 議論が推進項目 3 と関連しているが、人と人をつなぐことや機能をつなぐことも連携である。人材バンクがあっても、行政の中だけでその情報を持っているのは勿体ない。つ

なぐシステムを作って、情報の共有のために地域で活動している他の活動団体にもデータベースをオープンして、クラウド的に人材をつないでいくことができれば面白い。

○ メリットの具現化による参加の喚起について

＜委員意見＞

- ・ 京都市の空き家対策のメンバーは基本的に不動産業者だが、活動が仕事にダイレクトに返るので多くの人に参加する。「まちカフェ」もつながりのある人が入ると長期的に関わってもらえるのではないか。つまり、課題が出た時に、それをビジネスにしている人をコーディネーターとして送り込むと、取組方によってビジネスになるので頑張ると思う。
- ・ 同様に、メリットが見えたら取り組もうとする人がいると思う。やる気を起こさせるネタもつなぎ合わせると新規の事業が生まれるかもしれない。
- ・ 東山の NPO が空き家対策をすると不動産業者を中心に動くが、その中で私たちは地域の就労の場をつくりたいと考えており、新しい雇用が生まれると地域が盛り上がると思う。シングルマザーも高齢者も近くに短時間で働ける場ができれば収入が得られるし、コミュニケーションの場にもなる。ボランティアだけではなく、メリットと楽しみを共有できるようにしないと続かない。
- ・ 活動が実を結ばなければならない。100 人委員会が種となって後に花が咲いたのであれば、「こういう種からこういう花が咲いた」というストーリーを描いて見せることが大事である。ストーリーが見えないと人の心には届かない。
- ・ P12 の提言項目 2 は、まちづくり活動の継続性を高めるための支援が要ると書いているが、並んでいるのは資金支援のあり方ばかりである。その下にソーシャルビジネスやコミュニティビジネスが出ているが、ビジネスにつながる可能性があるとは参加することを皆が理解し、行政も「循環するから続く」という発想を持って提案するべきである。
- ・ 補助金探しになってしまうものを作りたいわけではない。

○ 活動を回すシステムについて

＜事務局＞

- ・ かつて京都は番組小学校以来の自治活動があったが、次第にすべて行政に委ねられるようになった。しかし、行政も限界があるので、地域に委ねる包括自治組織の考え方が生まれた。例えば、京都市からの委託費を学区自治連合会レベルで受けて、市の広報物を学生や高齢者に配布してもらい、報酬を払うような取組を地域で話し合って決める等、このように働きに見合った対価を払う体制ができれば地域活動の進んだ協働につながる。

<委員意見>

- ・ そういうシステムができれば、地域ベースの地縁型の活動が活発になる。これはブロックでお金を下すこともあると思う。
- ・ 一方で、地縁型の活動をしたくない人もいるので、そういう人たちにも嫌々ではなく、自分で活動したいと思って参加してもらえるとこれから広がる可能性がある。そういう意味では、コミュニティビジネスのようなところも事業化を後押しすることが必要である。
- ・ 対価は地域通貨で良いと思う。例えば、中京コインのようなものを作って、それで町内の喫茶店でコーヒーが飲めるようにすると、費用が抑えられるし、喫茶店も潤うし、高齢者はコーヒーが飲めて満足できる。それだけでも人は集まる。他にも何ヶ所かで使えるようにすればつながりができる。
- ・ 継続するのはお金だけではなくて、楽しみもあると思う。自分と同じ思いの人が他にもいたという発見だけでも楽しい。もちろんお金は大事だが、補助金等の話ばかりを打ち出すと「金の切れ目が縁の切れ目」になる。

<事務局>

- ・ それに代わる循環するためのツールは、仕組みなのか、何なのかということになる。

<委員意見>

- ・ 継続するには、ある程度の時間を要する。現場で重要なのは人間関係であり、人間関係ができるには 3 年ほどかかると思う。その中で対話が生まれることが大事で、助成金も必要だし、場も人のつながりも必要である。
- ・ 市民活動センターでの活動は最低 4 年間の保障が大きい。1 年間では計算が立たなくても、4 年間でできることを考えながら仕事ができるし、人との付き合い方等、いろいろなことが変わってくる。いろいろな情報を複合的に合わせて仕掛けていくという発想である。
- ・ 地域は情報もなく、実務を担うこともできないので、「実務を担ってくれる人を紹介してほしい」という要望が出てくるが、活動を持続するためにそこに居続けることができないという矛盾が出てくる。そこで「来年もある」という状況が続くと、会話が生まれ、意見の集約の場所ができる。そこに外部の人が有機的に加わって、そこを回せる力になるかどうかは人との出会いによる。
- ・ 人材バンク的なものでコーディネートすることは大事であり、同時にそれが長続きするように専門家のコーディネートが重要になるが、そういう仕組みは 100 人委員会のような会議で頻繁に会っている中から少しずつ出てくるイメージがある。

- ・ まちづくりアドバイザーの交流はできているのか。区によって落差があるので、目的を明確にして、スモールビジネス、ソーシャルビジネスの手法を取り入れて、継続して皆が利益を得るようなモデルを作り、それをアドバイザーが他の行政区に発信するとともに早く進むと思う。
- ・ モデルの中に NPO や企業の知識も入るし、学生も来る。ビジネス化することは、持続性を保障することになる。
- ・ 一方で、ビジネスまでは求めないで、小さな活動をしたいただけの人もいるので、ターゲットによって支えの区分けが必要になる。
- ・ ビジネスという言葉は儲けのようなイメージがあるので、地域通貨でコーヒーが飲める程度の循環でも良いのではないか。
- ・ 循環していく瞬間に数多く出会い、そこで良い発見ができるような経験をした行政職員はコーディネーターの傍で自分の役割が見えるようになると思う。最初は種とも思っていなかったものが、付き合ううちに何かになるかもしれないと気づいた瞬間があったはずであり、そのような行政職員の証言や感想は大事である。成果だけを見せるのではなく、種をどう見つけたかというところから始まることが望ましい。小さく始めて数を重ね、その中の良いものをモデルにして回していくことになる。
- ・ そういう意味で、協働は行政の方にも市民の楽しみを共有してもらうことが大事である。淡々と支援するのではなく、一緒に楽しむことができると行政も変わらと思う。
- ・ 逆に活動が止まってしまったケースでは、人間関係が大きな要因になっていると思う。背負おうとする人たちが多過ぎて止まってしまったものもある。利害の対立もあるので、目的の違いを調整するのが一番大変である。その時に重なり合う 1 点を見つける人がいないと止まってしまう。
- ・ 自治会と一緒に活動するなら、自治会内の人間関係もあるし、反対派との関係もある。
- ・ 現場はそういうことの繰り返しで、当然お金も必要だが、理想的に回ると継続できる。

○ 協働事業を円滑に推進する機能の必要性について

<委員意見>

- ・ 協働は難しく、どうしても要望型になっていく。行政と協働することを分かっている人たちは行政との役割分担に納得していて活動しやすいが、要望型になりがちのところでは、理想的な協働が可能なのかと懸念される。ところが、行政が現場との間にいきいき市民活動センターを挟むとそこがクッションになって協働しやすくなる。
- ・ 子育て支援の現場は要望が多いが、要望の芯のところを相談の形にすると行政も受け止めやすいという話を聞いている。相談にしようと言ってくれる冷静な人が必要である。

- ・ 「自分ごと」の要望や困りごとを同じような悩みごとに集約、整理できるかが課題。

<事務局>

- ・ 今回の計画では、行政と市民の協働だけではなく、市民同士の協働も含めて考えているので、間に行政が入って紹介するとか、使える制度があれば使うことも含めて考えたい。
- ・ 市民同士、市民と団体、市民と大学等が協働し、そこに行政も関わる等のパターンがあるが、行政中心ではない大きな協働がこれからの課題だと思う。

<委員意見>

- ・ 行政側にも、アドバイザーとしてのスキルが非常に求められる。
- ・ 行政はアドバイザーではなく、まちづくりアドバイザーのような仕組みが間に入ってつなぎ役となる方が良い。

<事務局>

- ・ 行政の強い部分を活かしながら活動できたら良い。人材やアイデア、成功事例の蓄積も含めて紹介したり、共有したりすると良いのではないかな。

■全体会議

○ 市政参加・推進体制検討部会からの報告

＜部会長報告＞

- ・ 基本方針 2「市民の市政への参加の推進」と「計画を着実に進めるための推進体制」について、提言項目の意味を確認した。
- ・ 言葉の使い方や表現については、自分たちなりの言葉づかいに変える必要がある。それがポイントであり、「編集が必要」という意見から編集長が決まった。
- ・ 語尾の「必要がある」「求められる」という表現による意思の強弱も一般市民には分かり難いので、優先順位を分かりやすくするために、次回に向けた編集作業を行う。
- ・ 「市民」の定義に関する議論もあった。
- ・ 推進項目という表現が分かり難いという意見があり、「ステップ」としてはどうかという意見等、段階が伝わるような表現にしたいという議論があった。
- ・ チェックリストに関しては、事業が終わってからでは遅いので、予算化する段階、プランニングの段階でチェックができるようにする必要があることを確認した。

○ 市民活動推進部会からの報告

＜部会長報告＞

- ・ 市民のまちづくりのコーディネートに関して「一層の工夫が求められる」という文言があるので、「一層」というなら今までできていたことを検証して「何が足りないのか」「どこを推進すれば市民参加ができるのか」ということを具体的に書いた上で、一層の工夫を書くべきである。
- ・ まちカフェや 100 人委員会等の事業で多くの人材が育っているので、今いる人材の活かし方を考えると、今までストックした人材と今の活動をつなぐような時間軸を超えたコーディネートが必要ではないかという意見が出された。
- ・ もう 1 つは、継続が大事だということで、活動を継続して回していくには 3～4 年のスパンで見守る人が必要だが、市職員が担えるか否かを考えた場合、コーディネーターが 1 人で担えないのであれば、コーディネーションの機能を継続させるための仕組みが必要だという意見があった。これについては、誰が担うかという点をもう少し詰めなければ、コーディネーションの必要性を述べただけでは書いただけになるという議論もあった。

○ 今後の進め方について

＜委員意見＞

- ・ 第 1 部会は、2 について編集されたものを見て、同じように 3 を作る。1 人が編集するの

ではなく、それを基に皆で取り組む方法が良いと考えている。

＜事務局＞

- ・ 本日頂いた意見は事務局の方で整理する。

○ リーディング事業の提案

＜事務局＞

- ・ 頂いた提言を踏まえて改訂計画を策定するが、この計画を進めていく上で象徴になるようなリーディング事業を書くことが必要ということで、今までの議論を踏まえながら、第２期市民参加推進計画のリーディング事業について考えたアイデアを報告する。
- ・ １つは京都市版フューチャーセンターである。大学コンソーシアム京都が行っている未来の京都創造研究事業において京都におけるフューチャーセンターの活用を研究されている研究者の提案を形にするというもので、これについては参考資料６をご参照願いたい。
- ・ もう１つは、市民参加のコンシェルジュアプリである。これまで情報を届けるところで ICT の活用等も事務局から提案し、一方で市民参加のインセンティブが必要ということから、市民参加のコンシェルジュ的なアプリを作って配布するというアイデアである。
- ・ これらは我々で考えているレベルだが、これについてもご意見を頂きたいし、これに加えてご提案があれば出していただきたい。
- ・ 補足として、京都市版フューチャーセンターで取り組むべき事業例の１つ目が京都創生のチーム京都のサポートプログラムで、提言を施策につなげていくための取組である。

＜委員意見＞

- ・ これについての各委員のご意見は、次の部会や勉強会、あるいはメールで事務局に提出していただければと思う。

■議題（２）「市民意見を聴く場」の開催について

資料５「市民意見を聴く場企画概要案」について

＜委員意見＞

- ・ 本日は日程や大まかな流れ、会議名称を決めて、詳しい進め方は次回勉強会か全体会で決めることになる。

＜決定事項＞

- ・ 日程については、一番多くの委員が出席できる１０月４日に決めたい。

- ・ 名称についての事務局案は「市民参加推進井戸端会議～市民が主役のまちづくりの未来をデザインしよう！～」だが、異議がなければ、事務局案に決めたい。（異議なし）

<委員意見>

- ・ 参加対象は特に来ていただきたい方々を絞り込んでいるが、地域コミュニティ活性化計画が双子のような計画を進められているので声を掛けてはどうか。特に来ていただきたい方々には事務局からも声を掛けて、それ以外にもオープンな場として広く呼び掛けるという構えと理解している。

■傍聴者の意見

<事務局>

- ・ 本日の会議に対して、ツイッターでは特に意見ない。

<傍聴者>

- ・ 第 1 部会を傍聴したが、議論は、何かがあった時に市民が足並みを揃えて一体となって取り組めるような体制づくりの方に視点が動いたように思う。
- ・ 基本方針 1 の解釈が曖昧であったり、具体性に欠けたりすると分かり難くなる。足並みを揃えるために解釈が共有できるよう、曖昧な言葉は詳しい説明にした方が良い。
- ・ 協働や共感という言葉を京都市の市政でよく耳にし、興味があって参加した。議論については、市民へのフィードバックや未熟な段階の政策への参加が重要だと感じた。

<事務局>

- ・ 以上で平成 27 年度第 2 回会議を終了させていただく。

以 上